

廃タイヤの集荷に大きな変化が起きている。国内の自動車販売の鈍化に伴い、廃車台数が大きく落ち込んでいることや積雪地帯では降雪が例年より遅くタイヤ交換時期が伸びているなど、廃タイヤの発生量そのものが減少しているだけでなく、最近では再利用を目的とした世界各国への輸出が目立っている。

輸出向けタイヤの集荷は、これまで廃棄物収集運搬業者や処分業の許可を取得して廃タイヤの処理事業を手掛けてきた会社でなく、許可を持たない新規参入の業者が販売店やカーリンスランドなどを回って有価購入するケースが増えているという。

新たな回収業者が台頭するようになると、今年度から広域再生利用指定制度が廃止され、産業廃棄物の廃タイヤが通常の産業廃棄物と同様の回収システムに改定されたことも関

廃タイヤ集荷が激戦化

回収工夫と再生材開発で活路
再利用目的の輸出増

回収された廃タイヤ

係あるようだ。排出事業者である販売店にとっては、廃タイヤを廃棄物として出す場合、処理費用が掛かる上に以前よりも排

回収された廃タイヤ

手続きが煩雑になったことが処理先を見直す契機となったと見られる。

運送業やバス、タクシード宅配事業者などは、タイヤ交換時などに無償あるいは有価物として下取りする場を除いて販売店などで引き取れなくなつたため、廃棄物として排出する場、収集運搬や処分業者と直接契約が必要となった。

収集運搬業者にとっては、少量の排出元との契約が増えた対策として、集荷ルートの見直しや他の産業廃棄物と併せた回収など効率的な回収方法の追求が重要となっている。

処理業者には、回収した廃タイヤを優性的に不足している燃料向けに供給するだけでなく、タイヤの材質を利用し、付加価値をつけた再生材の開発をテーマに捉えているところもある。